

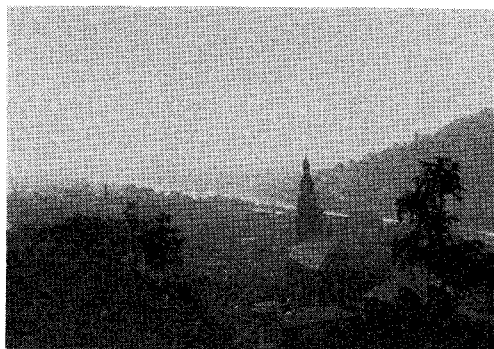
ハイデルベルグだより

磯 部 瑠 三*

ハイデルベルグは人口 11 万人程度の小さい町である。小さいと言っても、ドイツでは昔からの伝統で人口が地方に分散しているので、この程度でも特急列車 (TEE) の止まる立派な町の一つである。町の山手に日本でも有名な古城がある。ドイツの有名な観光地の一つなので、春から秋にかけては、中央駅から城に通じるハウプト・ストラーゼは、観光客に占領された感じになる。英語で話をしているのが多いが、日本語も、けっこういるようである。ネッカー河に平行に走っているハウプト・ストラーゼの両側に商店の間に混じって、ハイデルベルグ大学の建物がある。ハイデルベルグ大学は 14 世紀に創設されたドイツでも古い大学の一つであり、古い建物がそのまま (もっと後に建てられたものだが) 残っている。一方、ネッカー河の下流対岸に大学の規模拡大に伴って、新しい近代的な建物が建っている。学生数 16,000、教職員 3,000 であるから、その家族もいれると町の 30% 以上の人が大学と関係を持っている大学町である。

ハイデルベルグには、四つもの天文の部門がある。大学附置の天体物理研究所 (Traving 教授) と天文台 (Elsässer 教授)。Max-Planck 研究所の一つである天文研究所。それに、州立の天文計算研究所 (Fricke 教授)。この四つの研究所をあわせると 150 名余りの研究者・研究補助者が働いており、東京天文台 (約 200 名) に匹敵する規模である。Max-Planck 研究所は目下 Elsässer 教授が所長を併任していて、天文台にいそろろしているが、目下建設中の建物が出来ると Elsässer 教授が所長になって拡充する予定だそうである。また、2.2m 望遠鏡を始めとする研究所独自の望遠鏡をスペインに建設中で、来秋には 1.2m 望遠鏡が動き始める事になっている。このスペインの天文台が正式にスタートすると、今まで ESO (ヨーロッパ・南天観測所) のチリーにある望遠鏡で窮屈な思いをしてやっていた観測が大幅に進展出来るであろう。

私のお世話になっているのは天文計算研究所である。この研究所は州立であるけれども Fricke 教授を始め、天体力学の Schubart 氏や恒星天文学の Wielen 氏等は大学と併任になっていて、学生に講義をしている。この研究所はその名のごとく天体の位置・運動の問題を主に取り扱っている。特に、各種のカタログをまとめる世界



Heidelberg 市街

のセンターになっているので、天体の位置、固有運動、視線速度、等級、スペクトル型等のカタログをもれなく集めようとしている。そして近年計算機が使えるようになってきたので、すべてのデータをカードにし、さらに磁気テープに入れるために四人の人がかかりきりでやっているが (時々アルバイトも使って)、全部を終るにはまだまだ時間がかかるようである。私等が、時々使いたいカタログがまだカードになっていないと頼むのであるが、カタログの重要度が評価されて、評価が低いと何ヶ月も待たなければいけないようである。そんな場合でも、Fricke 教授の了解が得られれば第一順位に返り咲ける事がある。

ここの研究所のもう一つの大切な仕事は Astronomy And Astrophysics Abstracts (略して 4A と呼んでいる) を編集している事である。これは世界中で発行される天文関係の論文や本の題名と概略を項目別に分類してまとめた本で毎年二冊づつ出版されている。この仕事は Henn 女史を中心として五人の美しい女性と二人の計算機関係の人で行なわれている。また、項目分類には若い研究者が手助けしている。論文の概略はだいたい元々の論文の概略を短くする程度であるが、Henn 女史は時間の許す限り内容も読んでいるようである。ある時“あなたは電波関係の研究もやっているのか”と聞かれ、後に欧文報告の電波関係の人の論文の本文中に、私の撮った天体写真と私への謝辞の文章を見て (ただし、この時の写真説明の一部がまちがえて書かれていたのは残念であるが) ここまで読んでいたのかと感心した事がある。Henn 女史はよく仕事をする人で、朝 9 時から夜 10 時頃まで大抵仕事をしている。図書の一冊々々の出入を良

* 東京天文台
在, 西ドイツ



Necker 河畔

く覚えていて、見つからない本があるとすぐにその本の有り場所を教えてくれるので助かるが、反面女史のいない時には他の人に聞いてもあまりよろいょうを得ないのは困りものである。

こちらにきて驚いた事はこの研究所で行なう、いわゆる輪読会や、研究会が一つもない事である。十人あまりの研究者がお互いに現在他の研究者が何をやっているか、詳しい事は知らないようである。すべての研究者がFricke 所長に直結して、その指導の元に研究をしている感じである。さらに、これはヨーロッパ的なかもしれないけれども、研究以外の仕事は所長一人がやって他の人は何にもわずらわされる事なく研究だけを自由にやっつけられるようである。

この研究所の人が集まるただ一つの研究会は、四つの研究所が合同で毎週一回行なうコロキウムである。このコロキウムは、夏学期(4月~7月)は山の上の天文台で、冬学期(10月~2月)は大学の教室を使って行なわれる。冬に下に降りてくるのは、さすがに北国だけあってピリピリした寒さと、山では雪が積る可能性が強いからだそうだ。ハイデルベルグはドイツの中では雪の少ない所だが、それでもこの冬の間十数回雪が積った。しかし、東京のように気温で融けるのを待つような事はなく、どんなへんぴな道でもお昼過ぎまでには除雪されるのはさすがである。一方、夏学期はこちらの最高に良

い季節である。長い冬に押えつけられていたのが、四月下旬位から木々が一時に緑になる光景は一筆するとサッと色が変わる感じである。コロキウムの終る6時半から7時でも、まだ日が出ていてハイデルベルグの美しい町を望む事が出来る。コロキウムでは大部分他の研究所からきた人が話をしている。アメリカやソ連その他ヨーロッパの国々から有名・中名の天文学者が次々と来て話してゆく。これは日本では地理的にも経済的にも、とても考えにくい事かもしれない。

私のいる研究所にも計算機があるが、Siemens の小さなもので、おまけに機械語で書かなければいけないので、暦の計算や4A等のルーチン的なものを除いて、大部分の研究者は大学の計算センターにあるIBM 360を使っている。400人位の人が課題番号を持っているが、実際に一日に使う人は50人位で、1日3回程度デバックが出来るので非常に能率が良い。ただ問題なのは、計算センターと私の研究所の間は1km位で何回も歩いて行く気がしなく車で行くのであるが、計算センターは町の中心近くにあつて駐車場を探すのに一苦労する事である。ドイツはアウトバーンが発達しており、またどんな田舎でもチャント舗装してあり、車も夏冬のパケーションの季節を除いてほとんど混まないで車の利用価値は非常に高いのであるが、一歩町に入ると何世紀も前の建物の間を狭い道路が通っているという感じで、車の1.2倍位のスペースに次々と駐車している姿が、あちこちに見られる。駐車禁止の立札が立っている所でも平気で駐車してある。もっとも、これは駐車違反の罰金がわずか十マルク程度で駐車場の代金が約一マルクという事と関係があるかもしれない。ドイツ人は車の運転に関しては規則を良く守って慎重であるが、事駐車の問題になると話は別かもしれない。

ハイデルベルグは古いものと新しいものが上手く組み合わせられた美しい町である。しかし、私のようなセカセカした性格の持主には、あまりノンビリしすぎて、いるような気がして東京の雑踏がなつかしく思えるのである。